

20160511_銀座農業政策塾第5期プレ講座_議事録

日時：2016年5月11日（水）19:00-21:00

場所：東京・銀座 銀座会議室

テーマ：「農的社會をひらく」

発表者：葛谷栄一さん（農的社會デザイン研究所代表、当塾世話人）

参加者：参加者 15人（発表者を含まない）

（会社経営、会社員、公務員、NPO法人理事長、行政書士、司法書士など）

目次：

1. はじめに
2. 新刊「農的社會をひらく」から
3. 農的社會デザイン研究所の活動
4. これからの関心

発表：

1. はじめに

「人と自然」、「人と人」、「都市と農村」、「生産者と消費者」のつながりが日本の農業を維持していくために必要となっています。また、このためにも「地域農業」として取り組んでいくことが必要です。大規模経営によるプロ農家も必要ですが、零細な農家も多様な担い手として必要です。そういった担い手だからこそ、自分たちの風土にあった農業を行うことができます。

2. 新刊「農的社會をひらく」から

現代は、生きにくい社会、命の危機を感じる社会になってしまっています。これまでは物質的、経済的な豊かさを求めてきました。そうではなくて、今、求めるべきは幸せではないでしょうか？あるいは、物質的、経済的な豊かさとのバランスをとる必要があるのではないのでしょうか？資本主義を否定はできません。変えられるのならば変えたいです。しかし、社会主義がそれに代わるかという社会主義崩壊の歴史からして可能性はないように思います。資本主義は商品と貨幣により、人との接触、交流が変質するとともに、経済的分配が行われています。とはいえ、資本主義の暴走が許されるものではなく資本主義のバランスをとっていく必要があります。協同やソーシャルがそのバランサーとなるのではないのでしょうか？企業でも資本主義のバランスをとっているというところもあります。例えば伊那市にある寒天の会社、伊那食品工業（通称「かんてんぱぱ」）です。非上場の会社ですが、上場することで株主利益を重視する経営はしたくないというのがその大きな理由です。ゆるやかな末広りの成長を目指す「八の字経営」に取り組むとともに、良い会社をつくらうというのが社是です。社員を幸せにする経営が最大の社会貢献としています。つまり、本業で社会課題の解決をしています（CSV）。こうした取り組みをしている会社は限られますが、レベルは落ちるものの多くの企業がCSRを展開しています。スイスには、倫理銀行という企業への融資はCSRを行っている企業だけに限るといふ銀行もあります。CSV、CSRを離れては、企業の継続、持続はありません。協同組合は資本主義のバランスをとる役割を担っています。しかし、現状は伊

那食品工業のようなレベルとはかけ離れています。協同組合だけでなく、ゆるやかな協同を展開しているNPO法人、任意団体なども含めて資本主義とのバランスをとっていく必要があります。生命というものは人の意のままに、計算のままにはなりません。これが本質です。それを教えてくれるのが農業です。しかし、農業というどうしても産業的なとらえ方になってしまいます。そこで、「農」と捉えたいです。“静かなるレボリューション”は、協同と農によって展開が可能になると考えています。

新刊「農的社会をひらく」では何人かの方の言葉なり論を取り上げて紹介していますが、これが本書の大事なポイントとなっています。その第一が「H氏語録」です。H氏は、山梨市での子どもいなか体験教室での田植えと稲刈りでお世話になっているおじいさんです。禅僧のような存在です。マスコミと政治家が大嫌いな方で、取材は絶対受けません。「人は人の分際を知るべきであり、余計なことで悩んでいるだけである」、「与えられた環境の中で、ありのままに生きるべきである」などの言葉をいただいています。また、「怒ってはいけない」と言っていますが、その言葉は自然から遊離してしまった人間のあり方に対する冷静で厳しいまなざしから発せられています。また、ピエール・ラビをも取り上げています。彼はフランスの有機農業家です。人間と自然、社会との関係について論理的かつわかりやすい言葉で伝えています。そして、木村快氏です。演出家、劇作家です。社会に一番欠けているのは協同として、70年代から協同を中心テーマとした作品を発表し続けています。今の現代座となる前の「統一劇場」での、地元の人たちが企画し人集めしたところを地方巡業しながら公演して歩くやり方、姿に山田洋次監督が感激して「同胞(はらから)」という映画を作っています。特色は、各地域の方々、現場の話を徹底的に取材して作品化することによって、社会が抱えている本質的な矛盾や問題を投げかけています。その感性は本物で、現場、地域で協同していくことの必要性、重要性を訴えかけています。

そして本書の核心となる農の持つ社会デザイン能力を提唱しています。具体的には食料自給能力、自立能力、コミュニティ形成能力、教育能力、生きがい・働きがい実感能力、文化形成能力をあげることができます。これらを引き出し目に見えるカタチにしていくことが課題となります。

3. 農的社会デザイン研究所の活動

ここで農的社会デザイン研究所の活動を紹介しておけば、その一つが伊那東部山村再生支援研究会での活動で、伊那市に毎月通って、ヒアリングをしています。当研究会ではいろいろな取組みが行われており、Uターン組が中心になっています。さらに、Iターン組もそこに近付いてきています。地域おこしでは客観的な目と様々な経験を持った第三者の存在が大きな意義を担っています。地域の活性化にあたっては農業の見直しと地域資源を活用が大きなポイントであり、これへの取組みがキーコンセプトになっています。取組みは4つの分科会でを行っています。①農業の担い手、②景観づくり、③林業・林産物の活用、④人的資源の調査です(④を私が担当しています)。この取組みから放牧が近々始まります。鳥獣害被害をなんとかしようということでもあります。段取りがある程度できてきました。林産物の活用は、カラマツの香料の液化です。商品化を進めています。マツタケをもっと生産しようというお話もあります。

マツタケの現在の国内最大の産地は長野県です。しかも、伊那地域です。高度800メートルを超えたところは松食い虫にやられています。アカマツもあります。専門家が驚くほどです。松林の下の枯れ葉が積み重なった下には菌が繁殖して真っ白けの状況ですが、管理をすればマツタケの生産を相当できそうです。この担い手を探しています。若者も食っていけるのではないかと考えています。痛感するのは、地域の活性化には外からの視点が必要ということです。研究会の活動の対象地域は、宿場街、道のどんづまり地、りんご生産地の3つに分かれます。宿場街は外からの人を受け入れていません。年寄りが多くなっています。どんづまり地は子どもの数が増えて保育園が存続できることになりました。年寄りが「お手上げ」して、バトンタッチをしたからです。年寄りががんばるのはほどほどにすべきなのでしょう。どんづまり地は担い手もあり、基盤整備もできています。もう一つのりんご生産地は若手の就農によって新しい経営ができるようになっていきます。りんごの木、1本で1万円の売上です。これが1000本なので1000万円の売上となります。パソコンで生産を管理しています。里親制度を導入してりんご生産のマイスターへの弟子入りを広げようとする動きもあります。生産されたりんごの多くは宅配にて消費者に直接販売しています。また、摘み取ってもらってお金を置いてもらうやり方をとっているところもあります。生産者と消費者の連携ができています。また有機農業で少量多品種生産を行う一方で人的ネットワークをつくり、現金収入を得ているIターンしてきた若手農業者もいます。

ちなみに、伊那市には産直市場「グリーンファーム」があります。その会長である小林文磨氏は傑出した経営者であると同時に非常に優れたアイデアマンでもあります。建物の看板には反原発、核廃絶が掲げられていますが、クマも売っています。ヤギ(100匹)のレンタルもしています。このたび、図書館+イベント会場を新設しました。お金をかけずにモバイルハウスで作ってしまいました。理屈だけでなく、実践力、行動力があります。

また農的デザイン研究所の活動の一環として、西東京市にておむすびハウスを運営しています。中身は学童保育ですが、子どもたちが自分たちで食べるものを作ることを基本にしています。握ってきた200円で近所の商店に行っておじいちゃんやおばあちゃんとやりとりしながらお米や味噌等を買ひ、庭先の野菜を自分で摘み取り、ご飯を炊いておにぎりをにぎり、味噌汁やおかずを作って食べます。食べてから遊んだり勉強したりします。以前は、子どもたちは午後の4時から7時までずっといることを前提にきていました。長くは入れない場合は休んでいたものが、最近は10~15分だけでも時間がとれればくるようになっていきます。そろばん教室に行くまで、塾から塾へ行く合間の、気晴らしに来てくれています。子どもが子どもをひっぱってきてくれています。

牧丘町の農土香では、子どものための体験教室を開催しています。自分でごはんをつくり、田舎暮らしを体験します。農家のところに農業体験にも行きます。これによりその農家にも農土香にかかわってもらう仕組みになっています。こちらは12年目に入りました。最初のころに来ていた子供が大学に入り始め、中には農土香に来て山梨が好きになったということで山梨大学に入学した子もあり、いろいろと手伝ってもらえます。こうした若者に少しずつバトンタッチしながら持続していければ、と期待しています。

4. これからの関心

これから取り組んでいきたいことの一つは地域自給圏づくりです。伊那東部山村再生支援研究会の活動をそこまで持っていければと考えています。地域自給圏は地産地消の範囲を広めたつながり、関係性です。自立、自給が大切です。外部依存は資本の論理にやれてしまいます。資本主義に対抗しつつ、うまく付き合っていくことが必要になっています。このためには地域でのコミュニティづくり、ネットワークづくりが大切であり基本となります。

以上